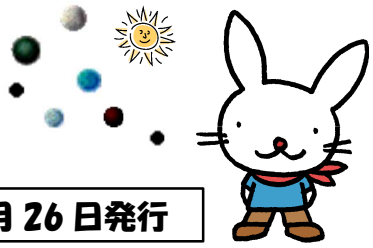
日本福祉大学
教育・心理学部ニュースレター



第 28号 2026 年 10 月 26 日発行

この号の主な内容

・こども学科キャリア企画
・実習体験記　－幼稚園実習－　1
・ゼミ紹介（渡辺ゼミ）
・ゼミ紹介（松下ゼミ）　2
・教員紹介　－学校教育学科－
・心理学科　ユニット企画紹介　3
・教員紹介　－心理学科－
・ゼミ紹介　－吉原ゼミ－
・ボランティア活動紹介　－サポート学生－　4

こども学科キャリア企画　－先輩から学ぶ「働く」ということ－



こども学科では、2026 年 7 月 11 日（土）の 3･4 限に、3 年生･4 年生を対象としたキャリア企画を開催しました。本企画は、保育･福祉の現場で活躍する卒業生を招き、在学生が将来の進路や職業について理解を深めることを目的として実施したものです。

3 限には、私立保育所（社会福祉法人池内福祉会、社会福祉法人新瑞福祉会）、乳児院･児童養護施設（社会福祉法人相和福祉会）、公立保育所（愛知県東浦町、愛知県阿久比町）、放課後等デイサービス（株式会社クレセールプラス）に勤務する卒業生をお迎えし、それぞれの仕事内容や職場の特徴、仕事のやりがいについてお話しいただきました。

続く 4 限では、愛知県私立幼稚園連盟の理事の方々をお招きするとともに、名古屋市西区の名古屋西幼稚園、岡崎市の竹の子幼稚園で活躍する卒業生から、幼稚園教諭として働く魅力や現場で求められる力についてお話を伺いました。

卒業生の皆さんからは、「学生時代をどのように過ごしていたか」「就職先や職種をどのような視点で選んだか」「就職試験に向けてどのような準備を行ったか」など、進路選択に役立つ具体的な経験談が紹介されました。また、就職後 1 年目の生活や仕事で感じた苦労、子どもや保護者との関わりの中で得られる喜びなど、現場で働くからこそ語ることのできる貴重なお話も聞くことができました。

質疑応答では、「仕事のやりがいを感じる瞬間」「悩みや困難への向き合い方」「給与や福利厚生について」「仕事とプライベートの両立は可能か」といった質問が学生から積極的に寄せられました。卒業生の皆さんは、自身の経験を交えながら一つひとつ丁寧に回答し、学生たちは熱心に耳を傾けていました。4 年生にとっては、8 月以降に本格化する保育職の採用試験を目前に控えた時期であり、3 年生にとっても公務員保育士試験に向けた学習に力を入れ始める大切な時期です。今回の企画は、学生たちが将来の働く姿を具体的に思い描き、自身の進路について考える貴重な機会となりました。参加した学生たちは、先輩方の経験や言葉から多くの学びと刺激を受け、今後の就職活動や学びへの意欲を一層高めていました。

実習体験記　－幼稚園実習－

子ども発達学科　保育･幼児教育専修4年
服部くるり（はっとり　くるり）第一学院高校



私は母園である私立幼稚園にて、3 週間の幼稚園実習を行いました。実習中、様々な課題に直面し難しさを感じる場面もありましたが、それ以上に多くの学びを得ることができました。今回の実習を通して私が最も深く学んだことは、子どもの主体性を尊重する保育の重要性と、自然との関わりの中で命の尊さを育む保育者の援助についてです。

幼稚園は山の麓にあり、とても自然豊かな環境の中、子ども達はのびやかに生活をしています。私が実習に訪れた時期は、ちょうど虫探しやトカゲ探しがブームとなっていました。園では子どもたちの興味･関心を捉え、園庭に虫が入る容器を常備するなど、遊びがより発展するよう環境構成を行っていました。子どもたちは自ら進んで容器を持ち、園庭での探索活動を主体的に楽しんでいました。遊びの場面では、子どもたちから「トカゲを捕まえよう！」「バッタを探そう！」と誘われる機会が多く、保育者が子どもと同じ目線に立ち、（次ページに続く）

一緒に遊びを心から楽しむ姿勢こそが、子どもの遊びをより深める上で大切であると実感しました。 さらに感銘を受けたのは、週末の金曜日における保育者の言葉掛けです。休日中に虫やトカゲの世話をする人がいない状況を踏まえ、保育者は「虫さんたちはどうする？」と子どもたちに問いかけていました。単に「かわいそうだから逃がそう」と答えを押し付けるのではなく、子どもたち自身が命の大切さに気づけるような関わりをしていました。子どもは真剣に考えた後、自発的にダンゴムシを園庭へと返していました。また、年長児が死んでしまった虫のお墓を作っている姿も見られ、日々の遊びや対話を通じて、命を大切にする心が確実に育まれていることを目の当たりにしました。

今回の実習では、子どもの主体的な活動を支える環境構成や豊かな心を育む言葉掛けの重要性など様々なことについて学びました。この学びを活かし、将来は子どもと共に感動し、子どもの育ちを適切に支えられる保育者を目指して、今後の学業に励みたいと思います。

ゼミ紹介（渡辺ゼミ）ー「ふくし」の視点を持つ保育者にー

最近では、母親が子育てをもっぱら一人で担う状態を「ワンオペ育児」と呼ぶようになり、母親に集中する家庭内の役割やその負担感の大きさが問題視されるようになっています。その背景には、家庭の孤立化が進み、親族や地域の手助けを得られなくなってきたことや、父親（夫）が子育てに協力的でない場合もあるなど、日本の社会にみられる問題が密接に関係しています。産後うつや育児不安を抱える母親、障害児を養育する家庭、ひとり親家庭などの多様な家庭を、社会全体で支えていくために、保育士はどのような役割を担っていくべきでしょうか。

ゼミでは、子育て支援センターや障害児通所支援事業所などの現場に出向いて活動したり、フィールドワークを通して実践的な研究を進めていきます。子どもだけでなく、子育てを行う親の立場から地域の子育て支援の必要性を理解し、保育所や子育て支援センターなどの地域の拠点施設の役割について考察します。また、発達障害児などを中心に、発達に課題がある子どもとその保護者への支援についても学んでいきます。とくに、障害のある子ども本人の目線に立って「生きづらさ」を理解し、保育や教育等の場面における支援方法について研究したり、実際に現場に出て学生自身が支援プログラムを企画・実施しながら実践的に学ぶことを大切にしています。ゼミ生は、子育て支援に関心がある学生や、障害児支援、社会的養護など福祉的課題に関心がある学生たちが多いです。各自がそれぞれの研究課題を意識しながら、ゼミでの話し合いや研究発表、現場での実践的な学びを通して自分自身の「考え方」をしっかりと形成し、卒業後は「ふくし」の視点を持った保育士として活躍してくれることを期待しています。



ゼミ紹介（松下ゼミ）

学校教育学科 3年
宮下裕斗(みやした ひろと) 赤穂高校

前期を終えて松下ゼミでは造形活動、表現活動を通しての人とのかかわり方を学んでいると私は感じ取った。初回のゼミ活動では、ゼミ生全員で一つの板に思い思いに自由に絵を描く活動を行った。同じ板の上にそれぞれが自由に表現することで、一人ひとりの考え方や個性の違いを感じることができた。また、自分の表現だけでなく、周りの人がどのようなものを描いているのかを見ることで、他者の表現を受け入れることの大切さも学ぶことができた。その後の活動では、段ボールを使ってラケットを制作し、それを使って卓球を行った。身近な素材である段ボールから自分たちで道具を作り、それを実際の遊びにつなげることで、造形活動には「作る」だけではなく、「作ったものを使って人と関わる」という楽しさがあることを感じた。自分たちで考えて作ったラケットを使って卓球をする中で、自然と会話が生まれたり、相手と協力したりする場面もあり、造形活動が人との交流につながっていくことを実感した。



また、前期にはオープンキャンパスに向けた準備も行った。ブースでは、折り紙をラミネートして釣り上げる「釣り堀」と、白紙のうちわにちぎり絵をしてオリジナルのうちわを作りながら相談できる二つの活動を考えた。これらの活動では、ゼミ生だけで楽しむのではなく、初めてゼミを訪れる人が楽しみながら自然に交流できるように工夫することが重要だった。そのため、どのようにすれば参加する人が楽しめるのか、どのような活動なら会話が生まれるのかをゼミ生同士で考えながら準備を進めた。その後、新美南吉記念館できんぎんすなごのワークショップも行った。この活動では、1 日に 2 回ワークショップを行い、1 回目は先生からやり方を教えてもらい、2 回目は学生が参加者にやり方を教えるという形で行った。先生が教えているのをサポートするだけではなく、自分たちが実際に人に教える立場になることで、活動の内容を理解していることと、それを相手に分かりやすく伝えることは別の難しさがあると感じた。また、参加者との関わり方や声のかけ方など、造形活動を通したコミュニケーションについても考える機会になった。 このように前期の活動を振り返ると、松下ゼミでは自分たちが造形活動を体験するだけではなく、その活動を通して他者と関わり、さらに自分たちが活動を提供する側になるという経験もしていることが分かる。絵を描いたり、ものを作ったりする中で生まれる「楽しい」という気持ちを共有することが、人との関係をつくるきっかけになるのだと感じた。今後は施設でのワークショップも予定されているため、これまでの活動で学んだことを生かしながら、参加する人が楽しめる活動を考えていきたい。（次ページに続く）

また、相手によって興味や表現の仕方が異なることを意識し、一人ひとりの表現を大切にしながら関わることができるようになりたい。松下ゼミでの活動を通して、造形や表現は作品を完成させることだけが目的ではなく、人と人とのつながりを生み出すための大切な手段にもなるのだと学んだ。

教員紹介　－学校教育学科－

後藤田和先生

今年度より学校教育学科に所属することになりました、後藤田　和（ごとうだ　いづみ）です。専門は日本近現代文学・国語科教育学です。公立小学校教員を 1 年間、中学校の非常勤講師を半年間、公立高校の非常勤講師を 3 年間、そして高等専門学校で 4 年間、教鞭を取ってきました。小中高大学と幅広い学齢期の子どもたちに「国語科」を教えた経験を日福大のみなさんに還元していければと考えています。美浜にゆかりのある文学者と言えば、やはり新美南吉でしょう。「ごんぎつね」は全国の小学 4 年生が必ずと言っていいほど読んでいる、まさに国民的な児童文学です。

国語の授業には、大きく分けて二つの方向性があります。一つは教材「を」教える授業。作品の内容・あらすじ・語句の意味を正確に理解させることを目標とします。「この場面のごんはどんな気持ちか」を読み取らせる授業は、この典型です。もう一つは教材「で」教える授業。作品はあくまで「素材」であり、その作品を読む経験を通じて、どの文章を読む際にも使える汎用的な読む力を育てることを目標とします。「場面の変化に着目して人物の心情の変化を捉える」という読み方そのものを、「ごんぎつね」という素材で練習する――これが「教材で教える」という発想です。

もちろん、実際の授業はこの二つをどう組み合わせるかという問題です。「ごんぎつね」という作品の固有の魅力に触れさせながら、同時に「物語を読む力」を育てる。そのバランスをどう設計するかが、授業者の腕の見せどころでもあります。日福大での授業でも、みなさんと一緒にこうした問いを考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

心理学科　ユニット企画紹介



心理学科には、臨床心理ユニット、応用社会ユニット、発達福祉ユニットの 3 つがあります。各教員は 1 つのユニットを担当しており、学生は 2 年生以降、自分の学びたいユニットを宣言することにより、学びの方向性を定めながら学びを深めていきます。各ユニットでは、年度ごとにユニット企画を 2 つ行っています。今年度の企画は、臨床心理ユニットが「大学院入試対策講座（7 月に終了）」、「臨床心理ユニットの先生・先輩とお喋りしよう（後期予定）」、応用社会ユニットが、「統計スキルアップ講座（後期予定）」、「就職活動スタート企画（11 月上旬予定）」、発達福祉ユニットが、「児童心理司のお仕事について聴こう！」と、「発達・福祉の教員と話そう！（11 月 26 日（木）予定）」となっています。さらに、全ユニットの企画として「学科キャリア企画：卒業生の話を聴こう（後期予定）」を行う予定です。学生は自ら宣言したユニット以外の企画にも、参加することができます。

今回は 6 月 18 日（木）に行われた、発達福祉ユニット企画「児童心理司のお仕事について聴こう！」を紹介します。ゲスト講師として、愛知県にて児童心理司として働いている二宮諭先生にお越しいただきました。はじめに、児童相談所の役割と特徴や、児童相談所における児童心理司の役割についてお話しいただきました。児童福祉の最前線で心理職の専門性がどのように活かされているのか、相談を受けるだけでなく一時保護等の権限も持つ中で、迷いながらどのように支援を行っているのか等、非常に分かりやすく具体的にお話しいただきました。最後には学生から、外国人の子どもへの支援について、働く前と働いた後のギャップについて、公務員の心理職を目指す際、学生時代に取り組んでおいた方が良いこと等についての質問があり、丁寧に答えていただきました。来年度から心理学科はユニット制からコース制に移行しますが、このような企画を引き続き行っていきたいと考えています。（文責：奥村哲朗）

教員紹介　－心理学科－

牧野多恵子先生

2026 年 4 月に心理学科に着任しました牧野多恵子です。愛知県半田市出身で、生まれ育った知多半島にある日本福祉大学で研究・教育に従事できることを大変うれしく思っています。着任して早くも半年が過ぎました。講義中に足元をふと通り過ぎる小さなカニや、思いがけず出くわす大きめのバッタに驚かされることもありますが、豊かな自然に囲まれた心地良い環境の中で、学生の皆さんと一緒に学ぶことのできる幸運を日々しみじみとかみしめています。

私の専門は、臨床心理学と高齢者心理学です。これまで「年齢を重ねても自分らしく生きるには、何が大切なのだろうか」「年齢を重ねる中で直面する病やさまざまな生活上の困難に対して、どのような心理的支援が有効なのだろうか」という問いに関心を持ち、特に認知症を抱える方の心理的支援や高齢期のうつをはじめとするこころの問題のメカニズムについて研究をしてきました。

最近は、高齢期における新たな挑戦や社会参加にも関心を広げ、「年齢を重ねても自分らしく活躍できる社会の実現」について心理学の視点からアプローチを試みています。実際に高齢の方々へのインタビューを実施する中で、定年退職後も新しいことに挑戦したり、地域や社会のために活動したりする姿に数多く出会いました。「なぜ、年齢を重ねても新しいことに挑戦し続けられるのだろうか？」という疑問が現在の私の研究の原点となっています。

心理学の面白さは、誰もが持っているこころの「なぜ？」について、科学的なアプローチをできる点にあるのかなと思っています。皆さんが日頃感じている『人のこころの不思議』を一緒に探求し、深めていけることを楽しみにしています。

ゼミ紹介　ー吉原ゼミー

心理学科3年
荒井瑠奈（あらい　るな）



私が所属している吉原ゼミでは、社会心理学について専門的に学んでいます。ゼミの大きな特徴は、学生が主体となって活動を進める点です。授業では、吉原先生の話を聞くだけではなく、文献や資料をもとに自分で考え、その内容を発表する機会があります。いろいろなテーマについて扱うため、幅広い知識に触れられることも魅力の一つです。

ゼミでは、一人一人が担当したテーマについて調べ、レジュメや発表資料を作成します。発表後には、先生やゼミ生から質問や意見が出され、全員で内容について考えます。自分では十分に理解していたつもりでも、質問を受けることで説明が不十分だった部分に気づくこともあります。また、同じテーマでも人によって注目する部分が異なるため、さまざまな考え方を知ることができます。

活動を通して印象に残っているのは、ゼミ生同士で自由に意見を交わす時間です。堅苦しい雰囲気ではなく、疑問に思ったことを気軽に話せるため、発表者だけでなく聞いている側も積極的に参加できます。1人で調べるだけでは得られない視点を知ることができるため、話し合いを重ねることでテーマへの理解がより深まっていきます。

また、ゼミでは発表の準備や資料作成を繰り返すことで、情報を整理することの重要性も実感しました。調べた内容をそのまま伝えるのではなく、聞き手にとって分かりやすい順番や表現を考える必要があるためです。この経験は、大学での学習だけでなく、今後社会に出た際にも役立つと感じています。

現在は、これまでの活動を通して興味を持った分野について、卒業論文のテーマとしてさらに詳しく研究することを考えています。ゼミでの議論や発表を大切にしながら、自分自身の関心を深めていきたいです。吉原ゼミは、専門分野について学ぶだけでなく、多様な意見に触れながら自分の考えを広げることができる、充実した学びの場だと私は思います。

ボランティア活動紹介　ーサポート学生ー

心理学科4年
多田健太郎（ただ　けんたろう）誠信高校



私は 2 年後期からサポート活動に参加してきました。入学前から取り組みを知っており、私も誰かの支えになりたいという思いがありました。しかし、入学後は私自身の大学生活と一人暮らしを送るだけで精一杯でした。それでも、「大学で自分を変えたい」という思いから、紹介を機に活動へ参加しました。活動を始めた当初はサポートする側は完璧でなければならないと思い込んでいました。

しかし、私自身も障がいのある学生として大学生活を送る中で、その考え方に変化が生まれました。サポート活動で関わっていた学生と立ち話をしていた際、その学生に私の障がいについて伝えていないにもかかわらず、日頃の様子から気付いてくれていたのか、自然に「座りますか」と声を掛けてくれたことがありました。当時の私は自分を完全に「支える側」だと思い込んでいました。しかし、その一言から、支えていたつもりだった私自身も多くの人に支えられていることに気付かされました。この活動は次第に日常の一部となりました。

3 年次からは活動について発表する機会があり、4 年次にも登壇させていただきました。これまで避けてきた発表という大舞台に二度、立たせていただいたことは私にとって大きな経験となりました。その一方で、自分という存在を多くの人に知られることに不安を感じましたが、発表で述べた「まずは自分を大切にしてほしい」という言葉に多くの感想をいただきました。その言葉が誰かの心に残ったと知った時、自分が悩み、傷つきながらも活動を続けてきた時間を初めて僅かに肯定できた気がしました。

この活動に出会わなければ、講義のない日に旅行へ行くこともできたと思います。正直、思い描いていたような大学生活ではありませんでした。それでも私は、もう一度同じ状況になるとしても、この活動を選ぶと思います。それは、この活動で出会った人や経験が言葉では表せないほど、大切なものになったからです。そして、日本福祉大学でなければ、このような人との関わりを経験することは難しかったと思います。支える側と支えられる側という関係ではなく、人と人が関わり合い、互いを支えていることをサポート活動から学びました。

私は、この 4 年間で数え切れない景色を見てきました。この内容を読んだ人には綺麗事に思えるかもしれません。それでも、私が出会った人たちや経験してきた出来事や「ゆずれないもの」を忘れないでいようと思います。